

「好きな人とか、いなかったのか？」

「無いな」

「もし一般人を好きになったらどうする？」

「ありえない……いや、そうだな」

軽く眉根を寄せたヤマトは自分を見ていた。

「もしそんな人物に出会っていれば峰津院の意思とは別に

手に入れようとしたかもしれないな」

「じゃあしてみなよ」

「春海？」

「俺の事が好きなんだろう？　もし欲しいと思うなら、おいで」

冗談めかした仕草で両腕を広げた。

僅かに眉を上げるだけの反応しか示さなかったヤマトだが、やがて得心したように頷いて、

「成程、確かにこの感情に名前をつけるとしたらそういう事になるのだろうな」

春海の予想より遙かに鈍い答えを返してきた。

（こいつ、押し倒しておいて自覚は無かったっていうのか）

呆れ半分、残りは不意に訪れた情動で目の前の男を抱きしめた。

誰の目から見ても明らかなくらいこたわっているのに本当にヤマト自身が気づいていなかったとするなら、それは

今まで知らなかった感情だからだろう。まさかこの男の初恋の相手が自分なのだとしたら笑わずにはいられない。弧を描く口元が見えないようにヤマトの胸に顔を押しつけたがら春海は言った。

「やつぱりしようよ。俺今凄くその気になっちゃった。ヤマトのせいなんだから責任取れ」

返事を待たずに回した腕で背中をまさぐり、ヤマトの反応を探る。

「明日に障ると言っただろう。もう寝たらどうだ？」

惘然とした声だった。困っているようにも聞こえる。

「こんな気分のまま眠れるはずないじゃないか。お互いにすつきりしたほうが絶対良いよ」

「誘いにしては品が無くて直截に過ぎる。だが、お前の言うとおりかもしれないな」

微かな笑い声が出た。耳に心地良い声が自分の名前を呼ぶのに聴きいりながら瞼を閉じ、唇を合わせながらタイを解き釦を外した。

「着痩せするほうなんだね」

特別鍛えてはいないが余計な肉もついていない上半身に手のひらを滑らせる。ヤマトの手も同じように春海の身体をまさぐっていた。手袋を嵌めたままの指先が背中から腰の辺りに降りていく。手触りの良い布はひやりとして、自